

学位論文要旨

学位論文題目：

ベトナム語の方向移動動詞
—日本語との対照—

申請者氏名 DO THI VAN

本研究の目的は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞を対照することにより、文法面、意味面における両言語の共通点、相違点を探ることである。

両言語の方向移動動詞を対照する前に、筆者は以下の5つの規準を作ってベトナム語の方向移動動詞を再分類した。

第一の規準、ベトナム語の方向移動動詞は、単語であり、空間運動の特定の方向を持つ（一定の方向に移動する）が、確定する運動様態を持たないものである。

第二の規準、確定する運動様態を持たないため、ベトナム語の方向移動動詞はある様態を持つ動詞（移動様態動詞）の後ろに置かれ、その動詞の方向を補充する。

第三の規準、ベトナム語の方向移動動詞は単独の動詞として用いられる。この場合、方向移動動詞は、空間の方向を示し、この空間方向は有限である。

第四の規準、主動詞の後ろに置かれる場合、ベトナム語の方向移動動詞は空間移動の意味がなくなり、他の意味になる。

第五の規準、ベトナム語の方向移動動詞は到達相を表す。

上記の規準を満たすベトナム語の方向移動動詞 đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)の11個とそれらに対応する日本語の方向移動動詞「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」の8個を研究範囲とし、意味面と文法面から分析した。

その結果、両言語の方向移動動詞の共通点と相違点が明らかになった。

ベトナム語と日本語の方向移動動詞の意味的面で共通点は3点ある。

1点目は、両言語の方向移動動詞は、空間的移動（ある目的地へ向け、移動する活動）でのみ方向性を持つことである。

2点目は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の中の đi (行く)、「行く」は方向移動動詞でもあり、移動様態動詞でもあるため、「完了相」と「未完了相」を表し、これ以外の方向移動動詞は「完了相」であることである。また、両言語の方向移動動詞の「ている」形では、「継続相」を表す。

3点目は、両言語の方向移動動詞は空間的移動でない場合、本来の意味に加えて「変化を表す意味」、「完了・結果を表す意味」、「心理的な意味」を持つことである。

意味的面での両言語の相違点は3点ある。

1点目は、空間表現の起点、経路、着点に関する相違である。ベトナム語の方向移動動詞は、方向移動動詞単独の場合と前置詞を用いることで起点、経路、着点を表すのに対し、日本語は助詞で表す。

具体的には、すべてのベトナム語の方向移動動詞は動詞単独で着点を表す。また、đi (行く)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる/上る)、xuống (降りる/下る)は、動詞単独で起点を表し、qua (渡る)、sang (渡る)は、動詞単独で経路を表す。前置詞で空間表現を表す場合は、起点は、本来の前置詞 từ (FROM)で表し、経路は、方向移動動詞から転成した前置詞 qua (THROUGH)、sang (THROUGH)で表す。着点は、全ての方向移動動詞から転成した前置詞 đi (TO)、đến (TO)、tới (TO)、về (BACK)、lại (TO)、ra (TO)、vào (INTO/IN)、lên (UP/ON)、xuống (DOWN/ON)、qua (TO)、sang (TO)で表す。

これに対し、日本語では、起点は「から」格と「を」格で表し、経路は「を」格で、着点は「に」格と「へ」格で表す。

2点目は、日本語の方向移動動詞の「ている」形は、「完了相」を表すが、ベトナム語の方向移動動詞には「完了相」が存在しないという点である。

3点目は、空間的移動ではない場合、ベトナム語の方向移動動詞は日本語と異なり、「催促と激励の意味」を持つことである。

ベトナム語と日本語の方向移動動詞の文法面の共通点は、両言語の方向移動動詞は、「文の主動詞の役割を担うことである。一方、相違点は、「動詞+方向移動動詞」では、ベトナム語の方向移動動詞は、前置詞の役割を担う。しかし、日本語の方向移動動詞は、補助動詞と後項動詞の役割を担うことである。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 151 号	氏 名	DO THI VAN
論文題目	ベトナム語の方向移動動詞 —日本語との対照—		
<p>(論文審査概要)</p> <p>系統の異なる言語の対照研究は近年盛んになっている。また、移動動詞の研究も Talmy(1985)以来、盛んに行われている。本研究はこの二つの流れに沿ったものである。</p> <p>移動動詞は移動の様態を表す様態移動動詞と移動の方向を表す方向移動動詞に大別されるが、本研究では、後者に目的を絞ってベトナム語と日本語を対照している点が特徴である。</p> <p>その上で、本論文では異動を明らかにしている。相違点としては次の様な違いがある。第一に、移動に関する空間を表すのに、日本語では一貫してなんらかの助詞が必要であるのに対し、ベトナム語の移動動詞は前置詞を用いる例に加えて、動詞が直接位置名詞句を取ることもあるという違いがある。第二に、また、日本語の方向移動動詞が完了相の解釈を取り得るのに対し、ベトナム語の方向移動動詞は完了相を表せないという違いがある。</p> <p>共通点としては、いずれの言語においても方向移動動詞は統語的・意味的な拡張が見られる。統語的には、補助動詞(日本語・ベトナム語)、前置詞(ベトナム語)としての用法が存在し、意味的には変化、完了を表す様に拡張され、また、心理的な意味に拡張されるものもある。</p> <p>なお、本論文はこれまでの予備審査における草稿に比べて、内容・議論の流れに関して相当な改善がなされ、日本語の表現に関してもかなりの改善が見られる。</p> <p>観点別の評価については以下の通りである。</p> <p>1. 創造性 日本語とベトナム語の対照研究は非常に少なく、中でも移動動詞に関する対照研究は前例がほとんどないため、その点において、本研究は独創的である。現象の記述は堅実になされているが、表面的な記述にとどまり、両言語の異動の原理的な説明や、対照することで個々の言語だけを見ては気が付かない現象の発見にはいたっていない。しかし、現象の記述の堅実性は、将来の研究の基礎となり得、上述の独創性と合わせて、創造性の点においては達成できている。</p> <p>2. 論理性 動詞+方向移動動詞+場所名詞句という連続において、方向移動動詞が動詞と複合動詞を形成しているのではなく、場所名詞句を取る前置詞であることを、副詞の挿入や否定文を根拠に論証している。また、予備審査に見られた本論とは関係のない余剰的な論述が大幅に削除され、論文全体の内容が明確になるように改善されており論理性の点においては達成できている。</p> <p>3. 厳格性 主要な先行研究は全て網羅されている。日本語に関しては、先行研究をなぞるだけで、批判的に解釈することはできていないが、関連する事実は遺漏なく言及されており、事実誤認や、議論に影響する様な大きな記載漏れはない。それ故、厳格性の点においては達成できている。</p> <p>4. 発展性(選択的記述項目) 上述の様に日本語とベトナム語の移動動詞の対照研究は極めて少なく、先行研究も、二つの言語の移動動詞を個別に対照しているものしか存在しない。それに対し、本研究は方向移動動詞という、広い類別を対象としているという点で、発展性が認められる。類型論的にはベトナム語が移動動詞に関して Talmy(1985)の類型論において、どう位置づけられるかという類型論的な観点、あるいは両言語</p>			

の異動が何によってもたらされるかという理論的な観点からの考察につながる可能性があり、発展性の点においては達成できている。

外部審査委員の報告書も含めて、審査委員の合議において、各項目が達成できていると判断し、審査結果を「合」とした。

[Empty box for additional comments or details]

論文審査結果
<input checked="" type="radio"/> 合 <input type="radio"/> 否

審査委員 主査 (氏名) 和田 学

(氏名) 更科 慎一

(氏名) 富平 美波

(氏名) 有元 光彦

(氏名) _____ ④